

杉亨二を明治政府に推薦したのは新一万円札の渋沢栄一！

奥積 雅彦（総務省統計研究研修所教官）

【はじめに】

統計図書館コラム【人物編】No.0004「杉亨二」において、「渋沢栄一は、明治政府にいた大隈重信からの要請を受け、明治2年（1869年）10月には大蔵省に入省し、民部省改正掛（当時、民部省と大蔵省は事実上統合されていました）を率いて改革案の企画立案などに携わり、その際、改革のために「駿河国人別調」に取り組んでいた杉亨二を明治政府に推薦しました。」…と紹介したところ。ただ、その根拠となる資料を示していませんでしたので、関係資料をここに紹介します、

しぶさわ えいいち
渋沢 栄一（1840～1931）

明治・大正期の指導的大実業家。豪農の長男。一橋家に仕え、慶応3年（1867年）パリ万国博覧会に出席する徳川昭武に随行し、欧州の産業、制度を見聞。明治2年（1869年）新政府に出仕し、5年大蔵大丞となるが翌年退官して実業界に入る。第一国立銀行の総監役、頭取となった他、王子製紙、大阪紡績、東京瓦斯など多くの近代的企業の創立と発展に尽力した。『論語』を徳育の規範とし、『道德経済合一説』を唱える。大正5年（1916）実業界から引退するが、その後も社会公共事業や国際親善に力を注いだ。

【参考資料】【画像】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」



【渋沢栄一は、なぜ杉亨二を明治政府に推薦したのか】

維新政府にとって、戸籍の整備は一大急務でした¹。このため、杉亨二は、渋沢栄一の推薦で、明治3年（1870年）7月、民部省に出仕することになりました。

ところで、現代のように情報通信ネットワークが発達していないなかで、渋沢栄一は、杉亨二を知ることになったのかについて、素朴な疑問がわくところ。維新後における渋沢栄一と杉亨二の年譜（⇒別表参照）をみると、渋沢は、明治2年に、駿府藩（後に静岡藩）に「商法会所」設立し、その後、大隈重信の働きかけにより、明治政府に仕えることになりました。一方、杉は、維新後、駿河に移住し、明治2年に駿河国人別調を行いました。横山雅男『杉先生講演集』²及び河合利安 編『杉亨二自叙伝』³における書きぶりから、杉亨二は、渋沢栄一との面識がなかったとみられ、因数分解的に二人の共通項を見出すと、明治2年に駿府藩（後に静岡藩）に居住していたことがあげられますが、前掲の年譜からは、それ以上の手がかりは得られませんでした。いずれにしても幅広い人的ネットワークの構築によるものと思われます。この観点から二人の共通項（共通の知人）としては、例えば、勝海舟が考えられます⁴。渋沢が、勝と会うようになったのは、フランスから帰国した後のこと。渋沢の主君である徳川慶喜が、領地として朝廷から賜った静岡の地に移り住むことになった時です。その際、渋沢は勝から杉亨二のことを知ったのかも知れません。ただ、想像の域を出ません。

なお、明治3年に杉亨二が出仕した民部省における彼の職務が戸籍調べであったため、彼は、政表（統計）の取調のことを含む建白⁵をし、わずか3か月ほどで辞職して沼津に戻りました。翌年、今度は太政官から政表（統計）の仕事で出仕を命じられました。これは、杉亨二の政表（統計）に対する熱意が明治政府を動かしたものと言えます。

【渋沢栄一は共立統計学校と東京統計協会も支援】

渋沢栄一は、生涯に約500の会社に関わり、同時に約600の社会公共事業にも尽力しました。統計関係の事業への支援も行いました。

具体的には、我が国初の統計学校である共立統計学校（明治16年¹⁸⁸³年開校。杉亨二が発起人）の趣旨に賛同して資金を援助し、また、明治28年に東京統計協会終身会員となり、同32年、同協会に資金の寄付を行いました。

（⇒渋沢栄一記念財団HP）<https://eiichi.shibusawa.or.jp/namechangecharts/>

（「渋沢栄一関連会社名・団体名変遷図」>教育>実業教育C、同>学術及び其他の文化事業>学術B）

【雑感】

杉亨二は、前述のとおり、渋沢栄一の推薦で民部省に出仕しましたが、そのミッションが戸籍調べで、杉の目指す方向と異なることから数か月で辞職することになりました。ただ、杉の民部省への出仕は、そのときの杉の建白を通じて、明治政府に官庁統計の整備を訴求することとなりました。これが奏効して、杉の太政官（政表）への出仕が実現し、人口センサスの実現など官庁統計の整備の礎を築くことにつながりました。したがって、杉の民部省への出仕は、我が国の統計行政のターニングポイントであったと言えます。

ちなみに、渋沢栄一の明治政府への出仕を働きかけた大隈重信は、「統計伯」とも呼ばれ、参議として統計院の設置を建議し、自ら統計院長に就任し、第2次大隈内閣時代には統計の重要性についての訓令を発しました。

そして、杉亨二が待望していた第一回国勢調査は、統計を重視していた原敬内閣の時代において成し遂げることができました。

彼らが、青天を衝く勢いで、さまざまな困難に立ち向かい、国づくりに貢献した…と、筆者の脳内の低性能なCPUは理解しました。

¹ 【参考資料】『内閣文庫百年史』171頁（辛未政表）

² 横山雅男『杉先生講演集』<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/898298/1/16>（国立国会図書館デジタルコレクション）（⇒参考参照）

³ 河合利安 編『杉亨二自叙伝』<https://dl.ndl.go.jp/pid/980787/1/38>（国立国会図書館デジタルコレクション）（⇒参考参照）

⁴ 【参考資料】渋沢栄一 述『青洲回顧録 上巻』312頁
<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1908667/1/231>（国立国会図書館デジタルコレクション）（国立国会図書館内/図書館・個人送信限定）

⁵ 建白の内容は、『杉先生講演集』に所収の「明治三年七月建白書」で閲覧可能。<https://dl.ndl.go.jp/pid/898298/1/278>（国立国会図書館デジタルコレクション）

別表 維新後における渋沢栄一と杉亨二の年譜

	渋沢栄一	杉亨二
慶応 4 年・明治元年 (1868 年)	明治維新によりフランスより帰国。	駿河国に移り徳川家教授方となる (12 月)。
明治 2 年	(※10 月まで駿府藩 (静岡藩) に仕官。) 駿府藩 (静岡藩) に「商法会所」設立。 (11 月) 明治政府に仕え、民部省租税正となる。民部省改正掛掛長を兼ねる。	(6 月) 駿河国入別調を実施。 (藩の妨害により中断に) 沼津兵学校教官に。
明治 3 年	大蔵少丞となる。官営富岡製糸場設置に向けて、事務主任となる。	民部省出仕命じられる (7 月～ 9 月)。 7 月 建白を行う。
明治 4 年	大蔵省紙幣頭となる	太政官正院大主記となる (12 月)。
明治 5 年	大蔵少輔事務取扱。抄紙会社設立出願。	「辛未政表」(総合統計書の源流) を刊行する。
明治 6 年	抄紙会社創立 (後に王子製紙株式会社取締役会長)。大蔵省を辞める。 第一国立銀行 (日本で最初に開業した銀行。旧第一勧業銀行、現みずほ銀行) 創立・総監役。	人口調査の実施について建議する (3 月、5 月)。
明治 7 年	東京府知事より東京会議所共有金取締を囑託される (後に東京会議所会頭)。	
明治 8 年	第一国立銀行頭取 (後に株式会社第一銀行頭取)。 商法講習所創立を支援。	
明治 9 年		「表記学社」を有志と設立する (後に「スタチスチック社」、更に「統計学社」と改める)。
明治 11 年	東京商法会議所創立・会頭 (後に東京商業会議所会頭)。	「製表社」を有志と設立する。明治 12 年、東京統計協会と改称 (同協会は現在の日本統計協会の源流)。
明治 12 年		「甲斐国現在人別調」を実施。
明治 14 年		統計院創設、同院大書記官となる。
明治 16 年	共立統計学校の趣旨に賛同して資金を援助。 大阪紡績会社相談役、同社工場落成。東京電燈会社創立。	我が国初の統計学校である「共立統計学校」を有志と設立する。教授長となる。
明治 17 年	日本鉄道会社理事委員 (後に日本鉄道株式会社取締役)。	
明治 18 年	日本郵船会社創立 (後に日本郵船株式会社取締役)。 東京瓦斯会社創立・委員長 (後に東京瓦斯株式会社取締役会長)。	官界を引退する (この後も、統計学社社長、講演などを続ける)。
明治 28 年	東京統計協会終身会員となる。	
明治 32 年	東京統計協会に統計講習会の資金の寄付を行う。	
...		

【参考資料】

- ・公益財団法人渋沢栄一記念財団HP (年譜等)
(年譜) <https://www.shibusawa.or.jp/eiichi/chrono.html>
(詳細年譜) <https://www.shibusawa.or.jp/eiichi/kobunchrono.html>
(資金寄付) <https://eiichi.shibusawa.or.jp/namechangecharts/>
(渋沢栄一関連会社名・団体名変遷図) > 教育 > 実業教育 C、同 > 学術及びその他の文化事業 > 学術 B)
- ・統計局HP > 統計 150 年の軌跡をたどる > 統計の偉人たち (杉亨二)
<https://www.stat.go.jp/museum/toukei150/ijin/ijin03.html>
- ・『渋沢栄一伝記資料』第 26 巻 (実業界指導並ニ社会公共事業尽力時代 第 23)(共立統計学校への資金援助関係)
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3016163/1/789> (国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)
- ・『統計集誌』(165)(明治 28 年 4 月 1895-04)(渋沢栄一が東京統計協会終身会員となった旨の記事)
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1573032/1/21> (国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)
- ・『統計集誌』(223)(明治 32 年 10 月 1899-10)(渋沢栄一が東京統計協会に統計講習会の資金を寄付した旨の記事)
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1573090/1/26> (国立国会図書館内/図書館・個人送信限定)

参考情報

大河ドラマ「青天を衝け」最終回では、官邸の総理(原敬)の執務室に渋沢栄一が訪問した際のシーンで、第一回国勢調査のポスターが掲出されています。



(NHK オンデマンド) <https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2021117297SA000/>

QR コード⇒

横山雅男『杉先生講演集』（明治 35 年^{1902 年} 8 月）*

其後明治二年であつたか政府から召された、それから東京へ出て来た所が大きい私の考とは違つた。私を周旋した人は誰ぞだ。だど云ふことだが私の考へを戸籍調をする。ことだと思つて居たと見える。政府でも私に戸籍の調をさせやうとした様子だ。つた、私はスタチスチックと云ふものは戸籍調をすることでは無いと云ふことを段々話した。それから建白をした。思つて居ることを——ひきいことを書いて建白して其後御趣意が違ふ以上は無用な人間だから御免を蒙りたいと云つて、グロート峻河に歸つてしまつた。

さうすると明治四年にまた出よと云つて来た。學校のことに關係して居たから尋になつて出かけて来た。すると、先年建白の趣もあるから其法を取調をするやうにと云ふことを内史に居た杉浦愛蔵とか云ふ人から傳達があつた。其れは誠にありがたいことだど云ふので其方法を調べて始めて持へたのが辛未政表と云ふもの、丁度入合地の開墾をするやうな心地した。

又其頃有名なベートルの遺訓と云ふものを譯して参議に出した。西郷大將に見せ

杉先生實歴談

二一

河合利安 編『杉亨二自叙伝』（大正 7 年^{1918 年}）**

○再び太政官より召さる

翌明治四年九月二十日に、又史官から御用召の選しがあつた。學校の事に關係して居たから、十二月二十日に出發して来た。すると正院に於て大主記に任ぜられ、先年建白の趣もあるから、政表の取調をするやうにと云ふことを内史に居た杉浦愛蔵と云ふ人から傳達された。それは誠に有り難いと大に喜び、速かに調べに取掛つたが、各省の事務を書いたものが無いから據り所が無い、そこ

此時、余を周旋した人は、誰であつたかよくは分らぬ、余の考を戸籍調をする。ことだと思つて居たと見える。政府でも余に戸籍の調をさせやうとした様子であつた。余はスタチスチックと云ふものは戸籍調をすることでは無い、と云ふことを段々話した。それから御趣意が違ふ以上は、無用の人間だから御免を蒙りたい、と云つて願ひ放して沼津に歸つた。

有用となす御沙汰之事も可有之候得共先づ其根本を御除き相成候は、上下合體之御趣意相貫き事實明白に取調も出来仕候儀と奉存候間此段別紙に申上候

○明治三年の建白

彼此する内、明治三年七月御用召で出京し、民部省出仕十二等官職を下さると云ふことであつた。何の爲めに出仕を申付かつたのか、一向趣意が分らぬ、そこで政事上に就て三ヶ條の献白をした。一は叙職を廢する事、一は四民互に婚姻するを許す事、一は土下座を廢する事即ち左の通りである。

一政表御取調相成候儀は凡そ天下之事物逐一政表之上に相記し候儀に有之候故名實難歸いたし候様にては利害大に御政務之上に關係致し候儀に付御趣意柄能々民心に徹底致し事實明白に相調候事第一に御座候然る處是迄數百年來被行來候舊法も可有之又御新政以來被仰出之條々も可有之夫是を以て民間にては新舊之法度繁雜に相成候儀も難計候に付上下隔絶之弊無之様無用を化して

*明治 25 年^{1892 年}に速記会記者が杉亨二の談話を筆記したもの。 **大正 4 年^{1915 年}の杉亨二の米寿を記念して、爾来、世良太一が杉亨二の立志談を随時記録したもの。